結局ふたりは手を繋いだまま清瀬の部屋まで帰ってきた。

珍しく走の方がいつ離すかのタイミングを見計らっていたのだが、口実かと思われた膝の不調は本当だったようで、清瀬の右足はやけに何度も地面を引っ掻いていた。今でも歩いているとき不意に引っ掻くし掠る程度のことはよくあることだが、ここまで頻繁に繰り返すのは手術直後の慣れないリハビリのとき以来だった。

走はいっそおぶってしまいたかったのだが、清瀬はこちらが戸惑うくらいにしっかりと指を絡めている。その横顔もその身に纏った空気もあまりにも楽しげで痛みとは無縁のもので、走は何も云えずにただ清瀬を見守るしかなかった。

清瀬の新居の前に辿り着くと、走はほっと胸を撫で下ろした。エントランスを越え、一階の一番奥を目指す。ドアの前に立つと、清瀬は瞳を細めて走を見た。

「走、鍵開けてくれないか」

走は内心奇妙に思う。鍵を忘れるなんて清瀬らしくないなと思いつつ、「ハイジさん、自分の鍵は持ってこなかったんですか」とパーカーの右ポケットから鍵を取り出す。清瀬はゆるゆると首を振った。

「いや、そうじゃない。スペアキーは部屋の中だ」

鍵穴に鍵を差し込もうとしていた走は驚いて動きを止めた。

「え……じゃあこれマスターキーなんですか。後で換えてください、そっちのスペアの方に」

「いいんだ。走に持ってて欲しい」

瞠目する走に対して清瀬はますますやわらかく瞳を細めた。繋いだ指先に力が籠もり、駄目押しのように「持ってて」と囁かれる。

走は嬉しいような困ったような複雑な表情で清瀬を見詰め、一度俯いてけれどすぐに顔を上げると自分からごつんとドアに額をぶつけた。

「俺、幸せすぎて頭壊れそうです……」

「馬鹿だな、なんでそうなるんだ」

走の言葉に清瀬が笑う。「ほら、開けて」と促され、走は清瀬と指を絡めたまま初めてその鍵を使った。

かちりという音にそっと静かに笑い合い、どちらからともなく手をほどく。

ドアを開けると薄くアルコールのにおいが漂ってきた。清瀬を先に通して、鍵をかけていたら「遅かったな」とキングが声をかけてくる。

走が「すみません」と反射的に謝罪するより先に、靴を脱ぎ終えた清瀬が笑顔でとんでもないことを口走った。

「走にプロポーズされたぞ」

「ちょ！　ハイジさん何云ってるんですか！」

驚愕し思わずその腕を掴むも、走に構うことなく清瀬はにこにこと奥の部屋から顔を覗かせた三人に話しかける。

「三年後、俺のいる実業団に行くから待ってて欲しいと云われた。今度は走が俺に頂点を見せてくれるそうだ」

なんでそれがプロポーズなんだと走が抗議の声を上げる前に、三人は本気なのか冗談なのか判別のつかない相貌で頷きあう。

「プロポーズだな」

「ああ、プロポーズだな」

「よかったな、ハイジ。じゃあな、走。俺たちそろそろ帰るから」

「えっ？　あの、俺は？」

帰るつもりなどないくせに、この展開にひとりついていけていない走は狼狽えて心にもないことを口にした。

先頭を切って廊下に出てきたキングは、まだ玄関に突っ立ったままでいた走にお前は本当に気が利かないなと云いたげな視線を向けてくる。

「泊まってってやれよ。アオタケからいきなりひとりになったらハイジだって寂しいだろ」

「そうそう、しばらく帰ってこなくてもいいぞ。なんなら春休み中ここに置いてもらえよ」

「ああ、その間に洗剤とか米とか重いものは全部走に運ばせればいい、そうしろよ、ハイジ」

ふたりが戻ってくる前に帰り支度をすませていたようで、次いでニコチャンとユキも廊下に出てくる。車椅子が楽に通れるように通常の独居アパートより広めに作られてはいるが、玄関と廊下兼キッチンのそう広くもないスペースに若い男が五人となるとさすがに狭苦しい。走は急いで靴を脱ぐと壁に張り付くようにして三人の為に道をあける。

云いたいことだけ云って、それじゃまたなと軽い調子で挨拶すると、三人はあっさりと清瀬の部屋を後にした。

ぱたんと呆気なくドアが閉まり、部屋には清瀬と走だけになる。しばしの沈黙の後、走の方が先に動き出した。らしくもなく鈍い身のこなしで再び鍵を閉めると走は拍子抜けしたような表情で清瀬を振り返る。

「別に何もしなくても帰っちゃいましたね」

「ああ」

膝が痛いから休みたい、俺心配だから残ります、そんな三文芝居の打合せまでしていた走と清瀬は顔を見合わせると同時に噴出す。

清瀬が部屋の方へと歩き出したので走もその後に続く。

「そういやさっきのプロポーズってなんですか、あれ。俺マジで驚いたんですけど」

「ああ、自慢したくてつい口が滑った」

予想外の台詞に意表を突かれて走は廊下の途中で足を

止めた。それに気付いた清瀬も立ち止まり、ほんの少しの距離を引き返してくる。
自慢って何をだと疑問に思う走の前に立つと清瀬はとても綺麗に微笑んだ。
「君が云ってくれたことが嬉しかった、だから自慢したかったんだ」
例えば魂というものが器のようなもので、そこに心という水が入っているのだとしたら、走の心の水面は風に吹かれたように激しく波打ち溢れかえった。
清瀬が走に右手を伸ばす。おそらく頭を撫でようとしたのだろう。走はその腕を無視して清瀬を抱き寄せた。
「ハイジさん」
伝えたいことは山のようにあるのに声になったのはそれだけだった。
清瀬の肩に顎を埋めるようにしながら、走はどうしたらいいのか解らなかった。清瀬の笑顔が綺麗なのは愛情だとか信頼だとか、そんな純粋で濁りのない感情だけで構成されているからだ。そして、それがすべて無償のものだからだ。あの衝突のおかげで走は清瀬について学んだことがある。
清瀬は何も求めない。
与えるだけで清瀬はなにひとつ見返りを求めない。そうやって何の痕跡も残さずに走を護ろうとする。ただ本当の気持ちを告げただけなのに清瀬がこんなにも喜んでくれている、その事実に胸が締め付けられるような思いがした。もっと清瀬を喜ばせたい。こんな小さなものじゃなく、もっとたくさんのものを清瀬に返したい。そう思うと同時に、走は清瀬に求められたいと思った。
走は清瀬を抱きしめながら唐突に強烈に清瀬のものになりたいと願った。
清瀬がもし自分の所有権を主張してくれたらきっと震えるくらい嬉しいに違いない。けれど、清瀬はそんなことをしないのを走は殆ど本能的に知っていた。走が俺はあなたのものですと云ったところでそんなのは無意味だ。清瀬は微笑んでありがとうと云うかもしれないが、それは上辺だけのものだ。本心じゃない。
「走？」
少し苦しげに名を呼ばれ、我に返った走は慌てて腕の力を緩める。「すみません」と云いかけたのを清瀬は今度は言葉ではなく唇で封じた。
触れるだけですぐに離れたが、驚く走の顔を覗き込みくすくすと笑う。頭の中が清瀬のことでいっぱいで処理しきれなくなる。伝えたいことがあるのに言葉を捜すより触れたいという欲望が身体の主導権を握ってしまう。背に回していた腕は迷いなく動き、清瀬の白く滑らかな頬を両手で包む。

唇で唇に触れると、それだけで酷く満たされたような気持ちがした。
公園で好き放題してしまったので、走はなけなしの理性を総動員してくちづける。やわらかな感触を楽しむように、唇をそっと押し当てたり軽く食むようにするのを何度も繰り返す。離れて、息をして、再び唇を重ねたら清瀬の方から舌を入れてきた。それを甘く噛んで吸い上げると肩に置かれた清瀬の指先に力が籠もる。
乱暴にしてはいけないと思っていたのに、気が付けば走は清瀬の身体を壁に押し付けていた。口を開き舌を伸ばそうとして半分だけ冷静になる。ゆっくりと差し入れて清瀬の温かい舌を舐めてみた。「ん……」と清瀬が細く震える声を漏らし、くちづけという行為そのものよりその声に走は駆り立てられる。早く早くと先を急ぎたがる己の欲望を走は必死で宥めていた。
不思議だった。
走はあまり性的なことに関心がなかった。自慰くらい当然するが、特定の誰かを抱きたいと思ったことがなかった。名前も知らない女の子に告白されたが、それは走の機嫌をよくするどころか眉間の皺を生んだだけだった。
好きだと云われても嬉しくなかったし、何故彼女が自分に対して好意を持ったのか疑問しか湧いてこなかった。むしろ彼女が好きな別の蔵原走がこの世のどこかに存在しているような薄気味悪さを覚えた。
血の繋がった親ですら上手く付き合えなかったのだ、誰にも理解されないし誰かが理解してくれるとも思えない。親しくなって愛情を交し合ってセックスをする、そういった手続きを踏んで緊密な人間関係を築いている自分の姿を走は想像出来なかった。他人との結びつきを断ち切るように生きてきた走は恋愛や色事の類とは無意識に隔絶していた。
それなのに、自覚してからは自分でもびっくりするくらい当たり前のように清瀬を抱きたいと思うようになった。清瀬は男なのに、走は何も躊躇を感じなかった。そんなことどうでもいいくらいに走にとって清瀬灰二は特別だった。
清瀬を知った後は自慰の回数まで増えた。毎日でも清瀬としたくて仕方がないけど、それは無理だから持て余した分を自分で処理する。自分でも異常なのではないかと思うくらい清瀬に対して発情している。
だが、走は単に吐精したいわけではない。上手く云えないがそうではない。好きだから触りたい抱きたい、もちろんそうだけどそれだけじゃない。
走は清瀬とひとつになりたいのだ。
感覚を共有し清瀬と気持ちを通じ合わせたい。
身体に侵入することで清瀬の心を侵食したい。